



2006年
10月発行

no. **72**

特集

インターネットで 世界の子どもたちをつなぐ

双方向の交流をめざしたオンラインプログラム

教育現場にインターネットが普及するなか、ウェブサイト上に世界の子どもたちが交流できる場をつくらうと、セキュリティや言語の壁にチャレンジしながら工夫をこらし、成果をあげている取り組みがあります。今回はそのなかから、低年齢層を対象に絵やお話を使った楽しいサイトを提供しているキッズスペース、日英間の交流を完全バイリンガルサイトで支えるジャパン・イギリス・ライブ!、世界中から約115,000の教室の生徒たちが参加するePALSをご紹介します。あわせて、インターネットを使った交流活動に10年間取り組んできた隠岐の島の中学校の先生の貴重な体験談も掲載します。大勢の人が継続的に参加できるインターネットの強みを生かすことで、どのような交流活動が可能になるのか、実践例に学びます。



あの雲の形は……。



はじめまして!
交流できてうれしいです。
これからよろしくね!



リサイクルしてますか?

教室を出るときは
こまめに電気を消して
みんなで節電を
心がけてます。



図書委員会の
当番活動の様子です。



僕が描いたラリー・カー。



陶器について調べたよ!

ゴミを減らすために
どんなことをやってる?



「花の精」を描きました!



こちらこそ、はじめまして!



学校で勉強している
ところです。

「犬」「ラリー・カー」「花の精」のイラストはキッズスペース、そのほかの画像はジャパン・イギリス・ライブ!の提供によるもの。

特集 p.1

インターネットで世界の子どもたちをつなぐ 双方向の交流をめざしたオンラインプログラム

- 子どもの創造性を引き出すサイト
- 日英のバイリンガル交流サイト
- 世界最大のオンライン学級コミュニティ
- 自分の書いたメッセージに世界のだれかが答えてくれる!

シリーズ p.10

見る聞く考えるやってみる授業 33
在日外国人の人権を考え、共に暮らす社会を探ろう
——米国日系人と在日コリアンの生活史から学ぶ

TJFニュース p.12

大連で二つの研修会を開催、80名の小・中学校の日本語教師が参加
延べ約100名の高校中国語担当教員が研修に参加
韓国朝鮮語教員のための研修、今年の夏も各地で開催
第3回国際教育シンポジウムに助成
実施事業一覧(2006年7月・8月・9月)

お知らせ p.16

子どもの創造性を 引き出すサイト



キッズスペース

<http://www.kids-space.org/indexJ.html>

キッズスペースファウンデーション代表 大庭さち子 [米国]

インターネットを通じて世界の子どもたちの創作活動と国際交流を応援する米国の非営利団体。1995年より16歳以下の子どもを対象にしたウェブサイト、キッズスペースを運営。現在は世界160以上の国からアクセスされている。



創作活動と国際交流を 応援



これは、キッズスペースに掲載されている作品で、絵はロシアのバーヤちゃん、お話は日本のりさちゃんの共同作業によるものです。

キッズスペースは、創造性を育てる国際ショナルキッズスペースと、コミュニケーションを支援するキッズスペースコネクションという二つのサイトから構成されており、それ

ぞれにいくつかのセクションがあります。

国際ショナルキッズスペースの「キッズギャラリー」セクションには子どもたちが六つのテーマ(抽象画、動物、ファンタジー、景色、サイエンスとテクノロジー、人々)で描いた絵が、「ストーリーブック」セクションには子どもたちが創作したお話が掲載されています。冒頭の作品が掲載されている「豆の木」セクションでは、ある子どもが描いた絵に別の子どもがお話をつけたりすることができ、ことばや国を超えた共同作業の場になっています。

一方、キッズスペースコネクションは、親、教師、子ども同士のコミュニケーションのためのサイトです。たとえば「キッズコネクト」セクションでは、ペンパル募集のメッセージを書き込むと、世界中の子どもたちから返事が届き、インターネット上で友だちをつくることができます。キッズスペースで知り合った子ども同士のやりとりが家族ぐるみの交流に発展し、お互いの国を行き来するまでになった、という事例もあります。

「自分でみつける」

キッズスペースでは、子どもの創造性を引き出すため、「自分でみつける・工夫する」をコンセプトにしています。たとえば、上述の「スト

ーリーブック」には、こちらが用意したアイコンをもとに子どもたちがお話を創るコーナーがありますが、五つのアイコンのうち少なくとも一つは何だかわからないものを入れておきます。お城と王様と剣のアイコンしかなかったら、お城のお話しかできませんが、わからないもの——ぐるぐるうずまきなど——が一つあることで、子どもはおもしろがり、想像をふくらませてお話を考えます。

サイト全体も、手取り足取りの説明はついていません。子どもがやらされていると感じずに、知りたいことを自分で発見できるようにしてあります。勉強ということばを使わずに、絵を描いたり文章を書いたりする仕掛けをつくることで、子どもの好奇心を刺激し、創作意欲、学習意欲を高めることができると考えています。

保護者がいっしょに参加

国際ショナルキッズスペースに送られてくる作品については、個人情報

が含まれていないか、悪質な内容はないかなど、すべての作品に目を通し確認したうえで掲載しています。そのため、掲載するまでに3日から7日と時間がかかりますが、安全には代えられないと考えています。

キッズスペースコネクションに参加するには登録が必要です。登録申請に際して、連絡先として保護者のメールアドレスを入力させます。保護者といっしょに参加すること、サイト運営者が常に保護者と連絡が取れるようにしておくことが肝要だと考えています。申請内容は1件ずつ細かく検討したうえで登録し、不審者の侵入を防いでいます。

キッズスペースコネクションでのメッセージのやりとりは、すべて確認することはしませんが、不適切なことばを含むメッセージは自動的に拒否され、送信できないようになっています。また、だれが、いつ、だれ宛にそうしたメッセージを書いたか、リストで見ることができます。必要に応じて内容を記録して保護者に警告し、悪質なケースは登録を抹消することもあります。

2000年に米国で施行された子どものメールアドレスや個人

キッズスペースのFAQから。
 (左) Emailってなあに?
 (右) ネットをつかうときのルールってあるのかな?

Email (イーメール) ってなあに?
 コンピュータネットワークをつかって
 おてがみのやりとりをするしくみ

Emailはふつうのゆうびんとそのしくみがよく似ています。EmailはインターネットやNiftyServeなどのネットワークでつかわれるおてがみのしくみです。ふつうのゆうびんといちばんちがうところはね、おてがみのはこばれるとちゅう。

			
Emailプログラムにおてがみをタイプします	Emailプログラムがそれをサーバーにはこびます	サーバーはあてまきのサーバーにはこびます	おともだちはEmailプログラムでおてがみをとってきます

ゆうびんでは

			
おてがみをいたらふうとうにいれます	きつてをはってポストにいれます	ゆうびんきよくがはこびます	おともだちはゆうびんうけからおてがみをとってきます

ネットをつかうときのルールってあるのかな?
 たいせつなルールがあります

- じゅうしょ、でんわばんごう、お父さんお母さんのはたらいているところ、学校のじゅうしょなどは、人にいったりフォームにかきこんだりしません。もしきかれたときにはお父さん、お母さん、先生にそうなんです。
- わたしの身長、体重、顔かたち、かみがた、いつもきている服などは、人にいったりフォームにかきこんだりしません。もしきかれたときにはお父さん、お母さん、先生にそうなんです。
- へんだなとおもうことがあつたらすくまわりで大人にいらせませう。
- ネットですりあいになった人とじっさいにあうのはじゅうぶんちゅういします。もしあおうといわれたときにはお父さん、お母さん、先生にすくまわりでそうなんです。あうときにはかならずくまわりの人がいる場所、お父さんお母さんといっしょにあいます。
- じぶんのしゃしんは人におくりません。もしおくってといわれたときには、お父さん、お母さん、先生にそうなんです。
- へんだなとおもうメールやいやなかんじするメールにはへんじをかきませない。そんなメールをうけとってしまってもこわがたりおこったりするひつようはありません。すくにお父さん、お母さん、先生にそうなんです。お父さん、お母さん、先生がオンライン安全グループやKids' Spaceに連絡します。

情報を親の承諾なくインターネット上の商業目的サイトで公表することを禁じる法律に準拠することや、インターネット上の子どもへのハラスメントについては直ちに政府関係団体に通報することを明記し、強く警告しています。

また、子どもたちに対しては、個人情報保護や悪意のあるメールを受け取ったときの対処法などインターネットを使うときのルールや、メールやブラウザとは何かという基本的な知識について親しみやすいことばで説明しています。

人は英語ができなかったため、お父さんが代理で返事を書いていたのですが、数が多く困っていたそうです。そのうちに、届いたメールを読みたい、返事を書きたいという思いから本人が英語を勉強し始め、半年後には英語でメールを書けるまでになりました。この男の子は、英語を、学校の授業のためではなく、友だちと話すためのことばとして学ぶという学習の意味を見出すことができたのだと思います。

下手な英語は自慢していい

キッズスペースのFAQから

Q. 英語でかかなくてもいいのかな?

A. 英語をつかってください。
 ギャラリーのさんかシートやおはなしにはほんごでかまいませんが、できるだけ英語もおくってください。
 もし英語をはなす国にうまれたら、とってもラッキー! 英語をはなさない国のキッズをたすけてあげてください。
 もし英語をはなさない国にうまれたらとってもとってもラッキー! インターネットで英語をかいたりよんだりできるようになっちゃうよ! 2カ国語ができるひとになれるよ!

英語をはなさない国のキッズへ:
 「へんじゃないかな、この英語……」とかおもわないでね! その英語は、あなたが「べつのことばをれんしゅうしている」りっぱなしょうこ!!
 どりよくしていることと、もうひとつのことばがじょうずだったことのしょうめいです。

インターネット上のグローバルな言語は英語であるという考えから、キッズスペースの公用語は基本的に英語です。サイトの説明と投稿された作品の一部は日本語にも翻訳していますが、翻訳を重視することは考えていません。むしろ、言語の壁を越える努力をしてほしいと考えています。サイトでは「下手な英語でも、もう一つ別のことばが話せるという証拠だから自慢していい」と英語を使うことをすすめています。

言語の壁については、おもしろいエピソードがあります。以前、日本の小学5年生の男の子がにわ

とりの絵を描いて「キッズギャラリー」に掲載したことがありました。とてもよく描けていて、世界中からその子のお父さんのメールアドレスに「上手だ」という英語のメールが届きました。本

スクリーンをはさんで人間と向き合う

私は、米国の大学院で音楽教育を学びましたが、それまでは日本から出たこと

がありませんでした。米国に来て、多くの国から来た異なる国や文化背景をもつ人に出会い、いろいろな生き方や考え方があることに驚きました。キッズスペースは、自分が得たそうした体験をインターネットを通じて提供できる場だと考えています。「国際理解」のためには、飛行機に乗ってほかの国に行く必要があると考える人が多いかもしれません。しかし、インターネットを使えば、わざわざほかの国に行かなくても国境を超えた交流が疑似体験できるのです。インターネットといっても機械を相手にするわけではありません。スクリーンをはさんで人間と向き合うことによって国際理解、人間理解が可能になると考えています。

また、私は導き手が前面に出ないで材料だけ用意して、子どもたちが自ら発見し創造するという音楽教育法を学びましたが、こうした手法もインターネットを使って実現できるのではないかと思いました。

大人になったときに、「イギリスっていうのはこういう国」ではなく、「イギリスに住んでいるジョンくんという子がいて、その子のお話に私が絵をつけたんだ」という体験をした子どもたちが増えるといいと思っています。これからも、共同で創作活動を行ったり、交流したりできる場を提供することで、文化や習慣、宗教、民族、人種などの壁を取り除いていきたいと考えています。

*本稿はインタビューをもとにTJFが編集しました。

日英のバイリンガル 交流サイト



★右は当サイトを一緒に担当しているポッター氏。

ジャパン・イギリス・ライブ!

<http://www.japanuklive.org.uk/>

ジャパン21 宮川恵美子 [イギリス]

ロンドンに拠点を置き、イギリスの初中等教育課程および地域・草の根レベルで日本文化紹介活動をサポート、奨励しているチャリティ団体。



ことばの問題を気にせず 思う存分交流

「ジャパン・イギリス・ライブ!」は、2001年にスタートした日英の子どもたちの交流をサポートするバイリンガルサイトです。交流で知り合った子どもたちが、言語の違いを気にせず母語で思う存分情報交換、意見交換をすることで、交流相手やその国を身近に感じ、異文化理解につながることをめざしています。そのため、子どもたちがサイトに書き込むすべてのメッセージを、日英それぞれの言語を母語とする翻訳スタッフが相手の言語に即日翻訳しています。

サイト内には、「みんなの広場」(小中学校向け)と「いっしょにホームページ」(小中高校向け)の二つのコーナーがあります。「みんなの広場」では、1年を五つの期間に分け、それぞれの期間に「家族」「学校」「町めぐり」「世界」「環境問題」など教育的目的をもったテーマを設定します。子どもたちはテーマにそって交流を進めていきます。テーマの設定にあたっては、両国のカリキュラムに合い、生徒にとってメッセージが書きやすい身近なテーマを設定するよう心がけています。テーマにそって五つの広場(掲示板)が用意され、子どもたちは自分の興味に合った広場で、メッセージや写真の交換を行います。このように年間の交流活動を構造化しているので、それぞれの学校の予定に合わせて、好きな時期に好きな期間^{★注}参加できます。そのため、教師はパートナー探しや交流の計画などに手間をかけずに、気軽に交流活動を授業に取り込むことができます。

「いっしょにホームページ」のコーナーでは、個別にパートナーを組んで交流を進める学校・クラスなどに、専用の交流スペースを提供しています。このスペース内には、メッセージと写真が送れる掲示板と簡単にオリジナルホームページが作成できるシステムを用意してあります。メッセージ交換だけでなく、調べ学習や共同学習などの成果をホームページにして発表することができます。

ほかに、ウェブカメラを使ったインターネット会議システムがあり、ウェブカメラとインターネットを使って、最高5カ所をつない

で会議をすることができます。ここでも、ジャパン21のスタッフが通訳として参加するので、ことばの問題を気にせず、顔の見える交流ができます。ウェブカメラで実際に相手の様子が見えるので、遠い国の子どもたちではなく、身近な友だちと交流しているという感覚がわいてくるようです。

★注:1テーマの期間以上の参加が原則。

生き生きとした交流を うながすために

ジャパン21では、文章だけでなく写真、音声、動画なども使って生き生きとした交流が生まれるよう働きかけています。また、必要に応じて管理者や翻訳者が、会話が深まるようにリードするコメントを送信することもあります。インターネット上でメッセージを書くことに慣れていない生徒や話題に困っている生徒のためには、各テーマごとに書き込みのヒントになるワークシートを用意しています。ワークシートは高学年用、低学年用と違った内容のものを用意し、同じテーマでも違ったアプローチで取り組めるよう工夫してあります。

一方、交流を充実させるためには、教師同士のコミュニケーションがとても大切です。そこで、当サイトに登録している教師全員のメーリングリストをつくり、いつでも情報提供や意見交換ができるようにしています。メッセージもすべて相手の言語に翻訳されるので、ことばの心配をせずに細かな内容まで相談することができます。たとえば、「みんなの広場」で活動しているクラスで返事がもらえない生徒がいる場合、このメーリングリストを使ってほかの学校の教師に返事を送ってもらうようお願いしたりすることもあります。日英の学校年度の違いやカリキュラムの違いから、交流に参加する期間やメッセージを書き込むタイミングにずれが生じてしまい、しばらく相手国から返信がこないということもありますが、今後はこの教師用のメーリングリストを利用して、お互いの参加期間や書き込みをする曜日、休みの連絡などが行えるようにしていきたいと思っています。

四季を楽しもう

アクティビティシート

各々の季節情報を知ろう

例：日本の気候や行事、日本の年中行事を知ろう

国	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
例：日本中学校	21/13	22/13	23/13	24/13	25/14	26/14	27/14	28/14	29/14	30/14	31/14	1/15
例：英国中学校	14/10	15/9	16/9	17/9	18/9	19/9	20/9	21/9	22/9	23/9	24/9	25/9

例：日本の年中行事を知ろう

年中行事	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
例：日本中学校	1月1日	2月3日	3月3日	4月1日	5月3日	6月3日	7月3日	8月3日	9月3日	10月3日	11月3日	12月3日
例：英国中学校	1月1日	2月1日	3月1日	4月1日	5月1日	6月1日	7月1日	8月1日	9月1日	10月1日	11月1日	12月1日

例：日本の行事を知ろう

行事	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
例：日本中学校	1月1日	2月1日	3月1日	4月1日	5月1日	6月1日	7月1日	8月1日	9月1日	10月1日	11月1日	12月1日
例：英国中学校	1月1日	2月1日	3月1日	4月1日	5月1日	6月1日	7月1日	8月1日	9月1日	10月1日	11月1日	12月1日

各テーマごとにワークシートが用意されている。

交流先の日本の小学生から届いた手づくりの冊子を見るイギリスの子どもたち。

イギリスの小学生から届いた手紙を手にする日本の子どもたち。

パスワード管理で 確実なセキュリティ対策

当サイトへの登録は、基本的に責任者となる教師がいる学校・クラス・クラブなどの単位で受け付けています。事前に責任者に連絡して身元確認をした上で登録することで、不審者の侵入を確実に防いでいます。登録者には個別にパスワードを発行しています。子どもたちが書き込みをするスペースはすべてパスワードで保護されており、外部から見ることにはできません。また、メッセージの内容は翻訳者と管理者がすべてチェックし、生徒が誤って個人情報を載せてしまった場合も、早急に削除し教師に連絡して対応してもらっています。

広がる交流の輪

最初は何を書いているかわからず困っていた生徒も、ワークシートや他の生徒の書き込みを参考にしながら、次第に多数の読者に向かってメッセージを発信することに慣れていきます。交流を続けるにつれ、広い世界に対する興味がわき、実際に訪れてみたい、または将来国際的な仕事につきたいと考え始める生徒も出てきます(欄外の生徒のコメント参照)。また、「みんなの広場」に参加していた学校の教師が、教師用メーリングリストを活用してパートナー校を探し、直接交流をするようになった例もあります。パートナーになってからは、「いっしょにホームページ」のコーナーに場所を移して活動を続けました。たまたま両校のある地域がともに陶器の生産で有名な場所だったため、共通のテーマを陶器とし、地元の窯元を訪問したり、本やインターネットを使って調べ学習をし、その内容を写真やイラストをたくさん使ってホームページにまとめ、それぞれ発表しました。

また、「いっしょにホームページ」を使って直接交流をしている学校のなかには、「ジャパン・イギリス・ライブ!」と併行して、郵便を使って写真やプレゼント、絵、学校生活や自国文化を紹介するDVDなどを交換している学校もあります。

ールでは日本ユネスコ賞を受賞しました(<http://www.mytownmap.or.jp/>)。今後も参加者の声を参考にしながら、使いやすいサイトをめざして常にシステムを更新していきたいと思っています。同時に、ウェブ会議のような交流に役立つ新しい技術を取り込み、IT教育の場としても役立ててもらいたいと思っています。また、これまで素晴らしい交流を実現してきた学校の体験をケーススタディとして公開し、他の参加者の方々にも参考にもらえるように工夫していく予定です。

※本稿はインタビューをもとにTJFが編集しました。

「ジャパン・イギリス・ライブ!」に参加している生徒のコメント(原文)

自分と異なる人(宗教上、国籍上、その他いろいろ)について知ることは、とても楽しいことです。今までは本やインターネットで調べて一つの見方だけで、イギリスに住んでいる友だちと普通に話ができるとは思いませんでした。「ジャパン・イギリス・ライブ!」のおかげで経験できなかった体験ができました。わたしはこの「ジャパン・イギリス・ライブ!」をきっかけにUKをはじめとした世界各国に行きたいという夢ができました。育った国が違っていても仲良くなれる!! そんなことを身に試みて感じました。

「みんなの広場」の「四季を楽しもう」についてのやりとり(原文抜粋)

■日本の中学生からのメッセージ：私の家の周りでは、雪が減ってきて、学校では桜もどンドン咲いてきました。私の家の後ろにそば畑があります。去年の話ですが、秋頃にそばの花が咲いてきてとてもきれいでした。きれいだったのですがそばの花粉で、鼻水が出たり、くしゃみがそばの花が無くなるまで、止まりませんでした。なぜか、私と姉だけくしゃみや鼻水がでました。今年も花粉で大変になりそうです。

■イギリスの中学生からの返事：今の季節は夏で、先週はすごく暑かったです。花粉症のことを言っていました、イングランドでは、それをヘイフィーバーと呼びます。僕も花粉症だと思うのですが、とても嫌だと思いませんか。でも、寒くて雨の天気よりはましですが。僕の好きなスポーツはサッカーで、ワールド・カップには大興奮していて、必死に見ています。先週はイングランドの旗を家の外に吊りました。サッカーは好きですか？ 家を僕のように飾っていますか？ みなさんのワールド・カップがいい成績でありますように。

ジャパン21、または「ジャパン・イギリス・ライブ!」に関するお問い合わせは、宮川恵美子氏(E-mail: emiko@japan21.org.uk)まで。

世界最大のオンライン 学級コミュニティ



ePALS Classroom Exchange

<http://www.epals.com/>

ePALS Classroom Exchange 社長 ティム・ディシピオ [米国]

米国を本拠に、教育向けコンピュータ・テクノロジーやインターネットシステムを提供する企業。ここで紹介するウェブサイトは基本的に無料で利用可能。あわせて学校向けのe-mailやブログのサービスを提供している。



世界各地のクラスから 交流相手探し

1996年にスタートした ePALS Classroom Exchange(以下,ePALS)は、インターネット上で世界中のクラスをつなぐプログラムで、現在191ヵ国、650万人の児童・生徒、教師、保護者が利用し、毎月1,500件の新規登録があります。言語学習、共同プロジェクト、メールのやりとりなどを通して、異なる国や文化についてお互いに学び、クラスや個人レベルでの交流や相互理解を深めてもらうことをめざしています。ePALSのサイトでクラスやグループのプロフィールを登録すれば、191ヵ国、約115,000のクラスから交流相手を探すことができます。交流相手を見つけたクラスは教師の指導のもと、e-mailの交換をしたり、テーマを決めて意見交換をしたり、共同プロジェクトに取り組んだりします。多くのクラスが、それぞれのカリキュラムに合った方法で、言語学習やグローバルな気づきを促すためにこのプログラムを利用しています。

公開ディスカッション

「生徒の広場」や「プロジェクトの広場」(「注目のプロジェクト」あるいは「話してみよう」の「公開討論」からアクセス)では、サイト上で意見交換や情報交換を行うことができます。「生徒の広場」では、「若者ことば」「あなたの家庭のルール」「1から10までの数の数えかた」「第1次大戦の勝者はだれ?」「風力発電」など、生徒が調べたいテーマを自由に設定して世界各地の生徒たちと情報や意見の交換をすることができます。「プロジェクトの広場」では、「ePALS オンライン読書クラブ」「緑の下の力持ち(あなたの国の知られざるヒーロー)」「戦争が子どもに与える影響」など、ePALSが設定したテーマについて、用意された資料などを参考にしながらじっくりと話し合うことができます。自分が書いたメッセージをいろんな国のたくさんの人が読んでくれると思うと、生徒たちもいつもよりがんばって文章を書いたり読んだりできるようです。それが、外国語や母語での読み書きの力の向上につながって

います。さらに、言語学習だけでなく異文化間学習や異文化理解、クリティカル・シンキングの育成にもつながります。

また、「先生の広場」では、教師同士がリソースや授業のアイデアを交換できます。たとえば最近では、日本の小学校の教師が「子どもたちが楽しく取り組めて、お互いに心を開いてつながりを感じることでできるレクリエーションやゲームのアイデアをシェアしましょう」と呼びかけ、活発な意見交換が行われています。そのほか、保護者同士が交流できるページもあります。

いろいろな地域の人と 安心して交流してもらうために

万全なセキュリティ対策 ePALSの最大の目的のひとつは、生徒の安全とプライバシーを確実に保護し、生徒も教師も保護者も安心して利用できるシステムを提供することです。そのため、交流相手を探したり、サイト上でのディスカッションに参加できるのは、クラスやグループのプロフィールを登録した児童・生徒や教師、保護者に限定しています。申請のあったプロフィールはわたしたちが厳しく審査し、サイト上で行われるディスカッションの内容もすべて掲載前にチェックしています。安全でプライバシーが保護された環境があるからこそ、参加者がディスカッションの内容に集中し、いろんな国の人たちとの意見交換を楽しむことができます。また、子どもたちが送受信するe-mailのやりとりを教師や保護者が事前にチェックできるモニター機能つきe-mailも開発しました。e-mailが実際に送受信される前に、自動的に教師や保護者に通知されるので、不適切な内容があっても、そのメールを子どもたちが送受信するかどうか教師や保護者が判断できます。

多言語に対応

ePALSは、日本語、アラビア語、英語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語に対応しています。また、自動翻訳機能を組み込んであるので、自分が書いたテキストや届いたメッセ

Safe email exchanges can improve student literacy and cultural understanding.

Participants from 191 Countries speaking 136 Languages now participating!

Just click on one of the regions below to see a map of that area. From there, you can click on any country to see a list of potential ePALS learning partners in that country. You can also quickly search for partners in any country by using the pull-down menu underneath each map.

Members from:

- Japan
- USA
- England
- France
- Italy

are searching for partners in:

- United Kingdom
- New Zealand
- Canada
- France
- USA

Click on a country link above to view member profiles for that country.

The newest ePALS member is: **Pakistan School from New Zealand**

Click on the member to view their profile.

Choose a region:

- Africa
- Asia
- Australia & Oceania
- Central America & The Caribbean
- Europe
- Latin America
- Middle East
- North America
- South America

Products and Services

© 1996-2006 ePALS Corporation. All rights reserved. Privacy Policy | License and Trademark Policy

参加者の出身国は191カ国、
母語は136言語に及ぶ。

ージ、ディスカッションの内容などを、さまざまな言語に翻訳することができます。もちろん、自動翻訳の場合、完璧な翻訳は望めませんが、自分がわからない言語で書かれた文章を理解したり、自分の書いた文章をほかの言語に訳す際の参考になります。実際にePALSを利用した生徒たちは、「わからないことがあっても、自動翻訳を使って内容を理解して返事を書くことができる」「自動翻訳を使うことでことばが違う人ともつながれる。会いたくなる」とコメントしています。

教室と教室の橋渡し役として

ePALSは世界中の教室と教室をつなぐ「仲人」のようなものです。10年

Student Talk - View Message

New Message Reply Messages Forums Help

Japanese Festivals, Japan from あけみ

Re:Japanese Festival, USA from Trenton

> Hello, I'm a student in Japan.

>

> There are many festivals in my town and the most famous one is called "Gorei."

>

> In that festival many Gods from each area are coming together by riding horses, and people wish for good harvests. Portable shrines and shops outside are essential in Japanese festivals.

>

> What kind of customs are you taking part in your country or district? If you know, please tell me.

Response from an ePALS student in the USA

Hi, my name is Trenton. I live in the U.S.A. My local town is having a watermelon festival. This is a yearly event due to area farmers large watermelon crops. There are seed spitting contest, eating contest, rodeos, parades, craft booths, and tons of food. Tell me more about these festivals of yours.

Translate from English to Spanish French German Italian Portuguese Chinese

日本の生徒からの
お祭りについての質問と、
それに対する回答。
画面下のボックスで
翻訳したい言語を選択できる。

間にわたって教室をつなぎ、サイト上の交流を見守るなかで、生徒たちが同じ10代の若者として悩みごとや興味などを共有していること、内容のある話題について話しあうことなかれらが個人的につながることがわかってきました。教室と教室の交流から個人レベルでの交流が始まり、参加者たちは世界中に友だちをつくっています。ePALSに参加している生徒同士が、将来、旅行者としてあるいはビジネスパートナーとして出会うこともあるでしょう。そのときに、インターネットを通じてすでに友だちになっていれば、お互いのあいだに壁があっても簡単に越えられると思います。

*本稿はインタビューをもとにTJFが編集しました。なお、ePALSを使った実践例については、p.8～9をご参照ください。

TJFの新たな試み 世界の中高校生のオンライン・コミュニティ

中高校生同士の相互理解を深めるもっとも効果的な方法は、かれらが直接出会って交流する機会を提供することです。しかし、経費などの問題があり、大規模で中身の充実した直接交流を継続的に実施するのは容易ではありません。TJFは、直接交流では難しい「多方向で、多数が気軽にいつでも参加でき、低コストで継続的」な交流をウェブサイト上で実現しようと、「であいフォトエッセイカフェ」(<http://www.tjf.or.jp/photoessaycafe/>)などのプログラムを実施してきました。現在、来年度に向けてウェブサイト上にさらに本格的な中高校生の交流の場をつくる企画に着手しています。2カ国(地域)間の交流にとどまらず、多方向の交流を実現するためには、1言語や2言語ではなく多言語への対応が不可欠だと考え、少なくとも日本語、英語、中国語、韓国語の4言語で書き込み、閲覧ができるようにする予定です。サイトへの参加を登録制にしてセキュリティ対策を万全にしたうえで、自分自身のことから世界的な話題まで中高校生たちが自分の話したいテーマについて、写真や音声、動画を使いながら自由に意見交換できるコミュニティづくりをめざしたいと考えています。

また、相互理解や文化理解をめざした外国語学習での利用も

有効です。海外や日本の日本語学習者、英語学習者、中国語学習者、韓国語学習者などが、自分の学習した言語を実際に使ってメッセージを書き、それに対する返事をもらうことで言語学習がよりリアルなものとなり、学習意欲が高まることが期待されます。さらに、その言語が話されている社会についてサイト上でいろいろな人たちの生の声を収集することで、その社会の人間から切り離された一面的な文化理解にとどまらず、実際の人間と結びついた多様で流動的な社会の現状をよりリアルに把握していくきっかけを提供できればと考えています。

一方、ウェブサイト上の交流とリンクさせて、小規模ながらも内容の充実した直接交流プログラムも実施していきます。直接交流の参加者にはウェブサイト上の交流にも参加してもらい、直接交流をより密度の濃いものにするのと同時に、その成果をほかのウェブサイト参加者と共有できるようにしたいと考えています。来年8月には第1回目の直接交流プログラム「Focus on Japan 2007」を日本で実施します(p.16参照)。

新プロジェクト全体の詳細については、企画が固まり次第お知らせします。



自分の書いたメッセージに 世界のだれかが答えてくれる!

——インターネットを使った交流の試み

島根県隠岐の島町立西郷中学校英語教諭 渡部正嗣

1994～1996年、REXプログラム(p.15参照)の派遣でオーストラリア、ニュー・サウス・ウェールズ州の高校に勤務。インターネットが始まったころ、海外の友人とのメール交換などを通じて、その楽しさにのめりこむ。「世界をせまく感じる」感動を生徒たちにも伝えたいとインターネットを授業などに取り入れるようになった。

パソコンの向こうに 生身の人間がいる

まだ28.8のモデムを使っていた10年前、オーストラリアの生徒とインターネットを介したチャットシステムを使って、はじめてリアルタイムで交流活動を行いました。当時、学校にインターネットの設備はなく、周囲の理解もあまり得られないなかで、自分のデスクトップパソコンを教室に持ち込み、延長ケーブルで職員室の電話ジャックから教室まで50mも回線をはって授業を行いました。チャットではオーストラリアの中学生と、画像を交換しながら、身近なことについて質問し合いました。学校の校則、小遣いの金額、休日の過ごし方などリアルタイムで送られてくる英文を、生徒たちは辞書を使いながら懸命になって読んでいました。パソコンの向こうに生身の人間がいるということが、生徒たちにとっては大きな感動だったようです。それ以来、4年に一度隠岐の島にやってくる日系4世アメリカ人のバスケットボールチームとネット掲示板・チャットを使って事前交流をしたり、オーストラリア・ゴールドコーストの商店街のメーリングリストを使って、「オーストラリアの人々が、日本・日本人に対してどのような意見や考えを持っているか」リサーチしたりと、インターネットを活用してきました。

「いろんな国の人たちから 自分に返事が来る」ワクワク感

単にメールを交換するだけでなく、いろいろな国についてもっと認識を深められるものはないかと探していて偶然見つけたのがePALS(p.6～7参照)です。ePALSにはさまざまなカテゴリーについて情報交換ができる「生徒の広場」というコーナーがあります。疑問に思うことを「生徒の広場」で質問すると、世界中の不特定多数の国の生徒から情報が寄せられます。「自分の質問に世界のさまざまな国の人が直接答えてくれる」という身近さや、しっかりしたセキュリティ管理、そしてすべての生徒にメールアドレスを設定できるのが魅力です。わたしは「選択英語」の時間に、生徒が自分でテーマを決めてリサーチ活動をする

のにePALSを使っています(欄外参照)。

ePALSには自動翻訳もついているのですが、基本的には辞書を使わずに。友だち同士で相談したり、自ら教員に質問したりする過程も大切なことだと考えるからです。学力の低い生徒には自動翻訳を使わせることもあります。その際、ふだん自分たちが話す日本語をそのまま翻訳すると訳のわからない英文になってしまうことを伝え、なるべく単純な構造の日本語にしてから自動翻訳にかけると指導します。英語で表現できない生徒の多くが、ふだん使う複文・重文の日本語をそのまま英文にしようとするために、「わからない」とあきらめてしまいがちですが、自分の言いたいことを簡単な日本語に言い直してみると案外英語で表現できてしまうものです。そういうことに気づかせる点でもePALSは有効でした。

ふだんはあまり時間が取れない「自分のことや身近なことについて英語で書いて表現する」という活動に、教員が無理強いしなくても生徒が自分たちで進んで取り組んでくれるのもePALSならではの点です。へたくそな英文ですが、何とか相手に自分の質問を伝えようと必死になって書いているのがよくわかります。その英文をだれかが読んで返事をくれるのですから、生徒の感激もひとしおです。返事に今まで知らなかったことが書かれていたりすると、思わず友だちに話したくなってしまいうようです。ePALSに限りませんが、「自分の質問に直接誰かが答えてくれる」というワクワク感は生徒にとってはたまらないようです。単語を覚えるのが苦手な生徒が、送られてきたメッセージにあった難しい単語だけは意味を覚えているなんてこともありました。海外の生徒から送られてきたメッセージがどんなに難しくても必死に読もうとするのは、そこに書かれている英文がまさに自分が求めている情報であるということ、そして「自分だけのために書かれた」特別な英文だからなのでしょう。

これらの活動を通じて、今まで知らなかったことに気づいたり、自分が常識だと思っていたことが世界では違うと気がつく子どもも少なくありません。かれらには、ときには日本の「常識」



渡部先生は、「たとえ成績の向上にすぐには結びつかなくても、英語を使って情報を得る楽しさを実感することに大きな意味がある」と考えている。

的な考えかたや行動様式に疑問を感じたりもしながら、自分なりの生きかたをしっかりと見つめて成長して欲しいと思っています。わたし自身も、外国のことを学んだり、外国で生活したりして、自分自身の生きかたに対する考えかたがずいぶん変化しました。外国のことを学ぶのは、最終的にはそこで得た情報を取捨選択して自分自身を高めていこうとすることだと考えています。単に「外国かぶれ」になったり「反日本」的になるのではなく、日本での自分の生活を豊かなものにしていこうとする態度を育てることが大切なのだと、生徒にも常日頃話しています。

インターネット上の ビデオ交流をめざして

これからはビデオによる交流が簡単にできるシステムがあればいいと思います。きちんとした管理のもと、さまざまな国の生徒によるビデオメッセージがアップロードでき、感想や質問を交換したり、それ以降の交流に結びつけたりすることができたら、たいへん利用価値のあるものになるでしょう。メールにも写真を貼付することはできますが、動画があれば生徒の興味関心はさらに高まります。外国のショッピングセンターや学校の様子が見られるだけでも楽しいし、「行ってみたい」という夢がふくらみ、外国語の勉強意欲も向上するかもしれません。プライバシーの問題をうまくクリアできれば、活用したいと考える教員、学校は多いと思います。わたし自身は、現在、中学3年生の選択英語の時間に、英語で自分の学校や地域を紹介するビデオレターを制作しています。生徒たちは学校の様子や校則、またこの地域ならではのものや場所、日本の文化や習慣などについて、自分たちで英文を考えビデオにとって編集するという作業を行っています。編集したビデオはネット配信できる形式に変換し、2学期には学校のホームページにリンクさせてパスワード付きで公開します。さらに、ePALSを使って、ビデオを見て意見を送ってくれたり、ビデオレターを返信してくれる学校を探す予定です。生徒たちは自分たちへのメッセージを心待ちに

しているのです、何とかインターネット上でのビデオ交流を実現させたいと考えています。

*本稿はインタビューをもとにTJFが編集しました。

Q どうやってしゃっくりを止めますか?

ePALSでの生徒のやりとり。この生徒はしゃっくりの止めかたについて質問し、世界中から44通もの返事が来ました。

生徒の質問

I am investigating the customs in many countries. I am very interested in how to stop hiccups. In Japan they believe that a big surprise will stop the hiccups. So we make a surprise shout from behind the person hiccupping. Or stopping a breath short will also stop the hiccups. When you have hiccups, how do you stop it in your country? Please let me know. I am waiting for your reply. (いろいろな国の習慣について調べています。とくに、しゃっくりの止めかたに興味があります。日本では、すごびっくりするとしゃっくりが止まると言われていて、しゃっくりをしている人の後ろから近づいて、わっと驚かせたりします。ほかに、ちょっとの間息を止めるのも効果があります。あなたの国では、どうやってしゃっくりを止めていますか? ぜひ教えてください。お返事待ってます。)

返事 (一部抜粋)

オーストラリアの生徒から:

When I have hiccups I eat a spoonful of sugar and that gets rid of them, hope this helps your problem. (わたしは、砂糖をスプーン一杯なめると止まります。あなたにも効くといいけど。)

メキシコの生徒から:

In my country we think that a good way to stop the hiccups is putting yourself head down and drink a little bit of water. (メキシコでは、お辞儀の姿勢で水をちょっと飲むといいって言われています。)

南アフリカの生徒から:

We also give each other big frights and holding our breath. But we can also drink out of a cup backwards. It might sound a bit strange but it works. (わたしたちも、驚かしたり、息を止めたりします。あと、カップの反対側のふちから飲み物を飲みます。変かもしれないけど効きます。)

*英語の原文をTJFが翻訳。

見る聞く考えるやってみる授業 —— ③

在日外国人の人権を考え、共に暮らす社会を探ろう

——米国日系人と在日コリアンの生活史から学ぶ

兵庫県立湊川高等学校教諭 バン ジョン ウン
方政雄



1 共に生きる社会のパートナー

現在、在日外国人登録者数は200万人を超え、人口に占める割合は1.57%、約64人に1人が外国人である。その数は毎年増え続け、外国人たちは定住化する傾向にあり、共に生きる社会のパートナーとして生活している。

日本人の間でも外国人との共生の必要性が語られ、さまざまな取り組みが始められている。しかし、日本社会にはよそ者排除意識や村意識が沈殿しており、在日外国人との共生・共存を実現するためには越えなければならない課題も少なくない。

米国においても第2次世界大戦中に日系人が強制収容され、不当な扱いを受けてきた。これに対して米政府は謝罪するとともに賠償金を支払い、日系人の名誉を回復している。この歴史的経緯や事実を日本にいる外国人、特に歴史的・文化的に関係の深い在日コリアンと比較検討することによって、移住外国人にとって望ましい社会や人権意識を考え、自己の内面を見つめ意識の変革をはかる授業を創り出したいと考えて、私は総合的な学習の時間で、単元「米国日系人と在日コリアンの生活史から在日外国人の人権を考え、共に暮らす社会を探ろう」という授業(表1参照)を行った。その2時間目の授業について報告したい。

2 米国日系人と在日コリアンの生活史

この授業では、①フレッド・コレマツさんと鄭商根チョンサンゴンさんの生活史を比較することによって、米国への日本人移住と日本へのコリアン移住の背景、法的地位、処遇などを学び、日本と米国を客体化、相対化して理解を深めること、また②外国人移住者・定住者の権利が保障される望ましい社会を考え、それが生徒の身近にいる在日外国人に共通する今日的な課題であるとの意識を持たせることを目標とした。

授業の流れとしては、まず米国への日本人移住と日本へのコリアン移住の違いを比較・説明し、次に、資料1を配布しフレッド・コレマツさんと鄭商根さんの生活史を説明した。そしてそれを整理した比較年表(表2参照)を配り、①戦争終結の1945年にどのような状況におかれていたか、②二人が裁判を起した年がいつで、裁判の期間、判決はどうであったか、

③どのような状況のもとで亡くなったのか、その時の思いを想像しよう、と問いかけ、生徒に考えさせるようにした。さらに「移住外国人にとって住みやすい社会とは」を中心にディスカッションを行った。私のほうから「外国人は日本人ではないから我慢することも必要ではないか」という質問を投げかけたり、生徒の素朴な疑問やネガティブな意見を大切にすることに留意し、自由な雰囲気で見聞が言えるように心がけた。

3 外国人にとって住みやすい社会とは?

ディスカッションでは、年配者生徒3名(本校は定時制高校であることもあり、60代後半の在日コリアン女性も在籍)が自分の人生をふり返りながら、戦後補償は、鄭商根さんだけの問題ではなく、在日コリアンに共通する普遍的な問題であることを、自身の無年金状況や、これまで受けてきたさまざまな民族差別について触れながら話した。そして米国日系人への不当な処遇についても、他人ごとではないと、自分たちの生活を重ね合わせながら、その過酷な運命に同情した。

裁判で勝訴し、米政府から謝罪と賠償金を勝ちとり、そして米国の人権活動に貢献した功績に対して大統領から大統領自由勲章を直接授与されたコレマツさんと、鄭商根さんとの落差は、日本の移住外国人に対する扱いに潜む問題を米国から照射した形となり、若い生徒も含めて改めて「日本」について考えることになった(資料2参照)。

非ワスプ(非アングロサクソン系白人)に対する差別は少なからず存在するとしても、移民に門戸を開き、生地主義により自動的に市民(国民)になることができ、出自によらず能力のある人を評価する米国と、血統主義により帰化しないと国籍の取得を認められず、異質なものを排除しがちな日本。単純に比較することはできないが、そこで暮らす移住外国人にとってどちらが住みやすいかを考える授業となった。



■表1: 授業の流れ

時間	主な学習内容・活動
1	「外国人(社会的少数者)」の心情を疑似体験させる【異文化接触疑似体験・バーンガゲーム】
2	米国における日本人移住と日本におけるコリアン移住の比較【歴史的背景、社会的状況】 米国日系人フレッド・コレマツさんと在日コリアン鄭商根さんの生活史
3	在日外国人について理解を深める【歴史と現状】 在日外国人と共に暮らすための課題について考える【①制度の壁、②心の壁】
4	ゲストスピーカー(在日コリアン2世・金Hさん[女性、40代])の話 ゲストスピーカーとの語らい【質疑応答、ディスカッション】
5	共に暮らすための提言【班活動: パスセッション・ランキング・プレゼンテーション】
後日	課題作文「在日コリアンをはじめ在日外国人と共に暮らすための私の提言」

■表2: 同時代を生きた米国日系人と在日コリアン

フレッド・コレマツさん

- 1919 ● 日系人2世として米国カリフォルニア州に生まれる。
- 1941 ● 日米開戦(真珠湾攻撃)。
- 1942 ● 米国「大統領命令9066号」発効。
- 1942 ● 収容を拒否し逮捕され、これを不当として提訴する。
- 1944 ● 米国最高裁判所で敗訴する(5年間の保護観察処分)。
- 1945 ● 日米戦争終結で収容所解散。釈放される。
- 1982 ● 裁判所に再提訴する。
- 1983 ● 裁判所、「収容は憲法違反であった」と判決。
- 1983 ● 米国議会は日系人の排除と拘禁に関する研究委員会を設置。謝罪と賠償金を支払うことを決める。
- 1988 ● 米国議会は「人権擁護法」を採択し、日系人強制収容が不当であったと宣言する。
- 1998 ● 「大統領自由勲章」を大統領から授与される。
- 2005 ● 権利擁護活動家としての一生を終える(享年86)。

鄭商根さん

- 1910 ● 韓国併合(植民地支配始まる)。
- 1921 ● 韓国の済州島に生まれる。
- 1942 ● 日本人として日本軍軍属に徴用される。
- 1943 ● マーシャル諸島で攻撃を受け負傷。
- 1945 ● 日本敗戦。日本(大阪)での生活始まる。
- 1952 ● 旧植民地出身者、「日本国籍」離脱させられる。以後厚生省、大阪府などに補償を求め請願するが却下される。
- 1991 ● 「援護法」の適用を求め、大阪地裁に提訴する。
- 1995 ● 大阪地裁、訴えを「却下」。大阪高裁へ控訴する。
- 1996 ● 控訴審を待たず逝去(享年75)。韓国の遺族が裁判を続ける。
- 1999 ● 大阪高裁、控訴を「棄却」。最高裁へ上告する。
- 2001 ● 4月1日、日本政府、旧日本軍の軍人・軍属の在日遺族に一時慰労金を支給。鄭商根さんの遺族は在日でないため支給されず。
- 2001 ● 4月13日、最高裁、上告を「棄却」。

■資料1

◎フレッド・コレマツさん

2005年3月、フレッド・コレマツさんが米国・カリフォルニア州で亡くなった。86歳であった。コレマツさんは1919年にカリフォルニア州で生まれた日系2世である。1941年、22歳のときに「真珠湾攻撃」があり、日米間で戦争が始まった。翌年、米政府は「大統領命令9066号(防衛のための強制移動の権限)」を発効し、「敵性」市民である日系人12万人を、砂漠に設けた11ヵ所の収容所に強制収容した。彼らのほとんどが家や財産を失った。コレマツさんは、自分は強制収容されるような悪いことは何もしていない、と収容所に行くのを拒んだため、逮捕され抑留された。コレマツさんは憲法違反である、と政府を訴えた。この訴訟は連邦最高裁判所までいったが、1944年にコレマツさんの敗訴で終わった。1945年に釈放されてからも「犯罪者」として扱われ、コレマツさんの人生に暗い影を落とした。

敗訴から38年を経た1982年、コレマツさんは再び同様の訴えを起こした。そして翌年、強制収容は憲法違反であったとする判決が下された。米政府は戦時中に収容された日系人に正式な謝罪を述べ、賠償金を手渡し、名誉回復をはかった。1998年にコレマツさんは、米国社会の人権活動に貢献したとして、民間人最高の栄誉勲章とされる「大統領自由勲章」をクリントン大統領から直接授与された。現在

ではコレマツさんを敗訴に追いやった1944年の連邦最高裁の判決は、アメリカ司法の歴史に残る汚点であるとされている。

◎鄭商根(チョン・サンゲン)さん

鄭さんは1921年、日本の植民地支配下の韓国・済州島で生まれた。コレマツさんより2歳年下である。1942年、21歳のとき日本人として日本軍軍属に徴用され、翌年マーシャル諸島で攻撃を受け、右腕を切断され、聴力に障害を負う。そして入院した横須賀海軍病院で敗戦を迎える。

戦後、在日コリアンに対する厳しい民族差別のなか、不自由な体でリヤカーを引いて廃品回収業をして生きのびてきた。1952年、鄭さんを含めた旧植民地出身者は、法務省民事局長通達で日本国籍を離脱させられる。同時に「戦傷病者遺族等救護法」が施行され、同様の状況にあった日本人は障害年金等補償を受けるようになった。しかし戦争中、日本人とされ、日本の国のために駆り出された旧植民地出身者は、戦後は日本人でないことを理由に一切の戦後補償を受けられなかった。鄭さんは行政に嘆願書を書くが、国籍・戸籍条項を理由に戦後補償も謝罪もなかった。一方的な国籍離脱から39年経った1991年、援護法の適用を求めて大阪地裁に自力で訴状を書いて提訴した。しかし1995年、訴えを

返ける判決が出され、翌年、大阪高裁での裁判が始まろうとした1996年2月、鄭さんは無念の思いのまま病気で亡くなった。「戦争はまだ終わっていない」が鄭さんの口癖だった。75歳であった。

その後、韓国の遺族が裁判を続けたが、最高裁は2001年「上告棄却」の判決を下した。「在日を戦後補償の対象から外すことは、立法裁量の範囲であり違法ではない」としか書かれていない判決文であった。

■資料2: 生徒感想文より

私ができることは、仲良くするだけでなく、周りの日本人の反応を見て自分が何をしなければならないのかを考えることです。もちろん考えるだけでなく、自分がどう行動しているかにも気を付けます。在日外国人が日本で暮らすにあたって、困難なことがたくさんあること、在日コリアンが名前(本名)をかくして生活していることを知りました。それだけ日本人の対応が悪いことも知ることもできたし、これからの私たちの在日外国人に対する対応を考えることもできると思いました。授業が終わっても、この問題を考え続けたいです。

TJFニュース

「TJFニュース」では、TJFの活動報告や、TJFの事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

■中国の小・中学校日本語教育関連プログラム

大連で二つの研修会を開催、80名の小・中学校の日本語教師が参加

さる8月12日から24日まで遼寧省大連市で、小・中学校の二つの日本語教師研修会を中国側教育機関と共催しました。参加した研修生は小学校50名・中学校30名、日本人講師は小学校8名・中学校7名。小学校日本語教師研修会は中国全土を対象としたもので、3ヵ年計画の今年は最終回で、過去2回のうちいずれかの研修に参加した各学校の中心的教師の再研修をめざしました。中学校は本年9月より大連市が新たに取り組む、「中学校における第2外国語としての日本語教育」を担当する教師のための研修でした。

小・中学校ともに、研修生の日本語力の向上とともに、授業設計により重点を置くことをめざしました。中国教育部が近年提唱している「素質教育」と、「課程標準」(学習指導要領に相当)がめざす総合的言語運用能力を高める日本語教育の実践方法を身につけることが課題でした。その一つの方策として「テーマ学習」の手法を導入しました。従来の教科書を教える授業から教師が自ら設計する授業への転換、文法や語彙などの言語材料を習得させる授業から言語運用目標を定めて言語材料をそれに付随させる授業への転換は、概念の理解のみならず、教師の日本語力にある程度のレベルが必要とされるだけにもとより容易なことではありません。研修生が目標をどの程度達成することができたのか、今後その定着も含めてフォローしていかなければなりません。小学校日本語教師研修も中学校の第2外国語としての日本語の教師研修も、中国では初めてのことで、試行錯誤を脱することはできませんでしたが、講師と研修生の熱心な取り組みによって、その第一歩を着実に踏み出すことができました。

一方、教師研修をめぐる初等中等教育における日本語教育の現状と、それに対する世論や教育行政、学校当局の動きも視野にいれなければなりません。日中間の政冷経熱は、日本語教育に少なからぬ影響を及ぼしていますが、その微妙な状況のなかで、遼寧省や黒龍江省に、教育行政の一環として日本語教育を位置づける動きがあることを私たちとしては大事にしたいと思えます。黒龍江省の朝鮮族、遼寧省のモンゴル族の拠点地域において、民族教育としての日本語教育が息づいていることは、日本人として深く受け止めなければなら

ないと同時に、あらためてその歴史的な経緯や、朝鮮語・モンゴル語と日本語とのつながりを認識させられます。言語の類似性および教師の調達が英語より容易である地域性が、日本語教育を存続させている要因だからです。

また大連市は、これまで漢族の日本語教育の拠点としてシンボリックな存在でしたが、近年は英語教育に押され、初等中等教育における日本語は壊滅的狀態に追い込まれていました。そうした状況のなかで、昨秋より市政府や市教育局があらためて日本語を見直し、第2外国語としての日本語を中高校に新たに導入する奨励策を4月に発表してくれたことは大変大きな意味をもっています。今回の大連滞在中も、大連教育局や教育学院の幹部や、大連市内の各行政区の教育長との友情を深めつつ、何回もの会合を通じて、財政的にも人材的にも日本語教師を一挙に増やすことはできないが、両親や学習者の反応を見ながら、準備のできた学校から徐々に弾力的な方法で実行に移そうとしていることを確認することができました。

TJFとしては、中国の日本語教育を推進するというよりも、相互言語教育の立場から、日本の学校における中国語教育や中国理解教育を推進し、それと日本語教育を連携させながら、日中の学校間(学習者・教師・校長間)の交流の流れのなかに日本語教育を位置づけたいと考えてきました。第2外国語としての外国語教育についても、従来の受験のための文法中心の授業ではなく、学習者の関心に沿った楽しい授業、コミュニケーション活動を豊富に取り入れた使える外国語の習得をさせるとともに、多文化共生を考える授業をめざしたいと思っています。そして最終的には、日中の同世代間の交流のための外国語であつたらと願っています。こうした理念を大連のリーダーたちと共感をもって語り合えたことは有意義でした。

しかし、こうしたリーダーの考えはまだ現場まで浸透しているとはいえません。研修期間中、教育局から政策の内容について、研修生や所属校の校長先生たちに直接説明してもらった場を設けることができたのは有意義でしたが、各学校の教育環境も異なり、校長の考え方も一様ではありません。トップダウンで動く面もありますが、学校当局、両親、生徒の考え、そして日本語の授業の質が、今後の日本語教育の存続の可否を



決定していくといえます。今回研修会に招集された中学校の教師たちも、研修初日は戸惑いを隠せない様子でしたが、最終日には30名の結束を感じさせる温かい雰囲気の中、今後の第2外国語としての日本語教育について抱負を語りくださり感銘をうけました。

TJFでは、交流をめざした日本語教育を具体化するために学校間の橋渡しをしています。今回の研修期間中も、神奈川県川崎市の宮前小学校から校長先生以下8名の代表団が交流相手の宇峰小学校を訪問、同県の橘学苑中学校も教職員8名が交流を始めた八十七中学を訪問しました。教師間に築かれたつながりが、児童生徒間の真の交流へと発展する日を楽しみにしています。この交流がきっかけとなって宮前小学校では、中国に留学した経験をもつ教員や、日本人学校に勤務していた教員が配属になったり、同校の夏期講座で中国語学習が始まったり、中国からきている子どもたちが交流の架け橋役になったりしています。橘学苑は県下でも中学校で中国語教育を導入している稀有の学校ですが、今回中国語を学ぶ中学生を取材させてもらい、写真とビデオ教材を制作しました。研修会でこれを教材とし、交流のための日本語教育をイメージしてもらうことができました。

今回初めてお会いした元大連市長の魏富海氏(大連に日本企業を誘致した立役者)は、「大連は歴史的にも、現在の日本との密接な経済関係からいっても、市民の意識のなかに日本語を受け入れる下地があります。大連の学校への日本語教育の導入に私も共鳴します。中国と日本の学校間交流もいくつかの方法があり、困難なことではないでしょう。困難なのは、困難だと思ふ人の頭を変えることだけです。」と流暢な日本語で語られました。大きな目標を掲げながら、まずはできることから一歩ずつ歩を進めたいと思っています。

(中野佳代子)

第3回全中国小学校日本語教師研修会実施概要

■実施機関等

主催：遼寧省基礎教育研究教師研修センター、大連教育学院、TJF
 助成：(財)三菱銀行国際財団、(社)尚友倶楽部
 後援：大連市教育局、吉林省教育学院、黒龍江省教育学院、中国教育学会外国語教学專業委員会、中国課程教材研究所、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館在大連出張駐在官事務所、独立行政法人国際協力機構(JICA)中国事務所、独立行政法人国際交流基金北京事務所

■実施内容

期間：2006年8月12日(土)～8月19日(土) 実8日間
 会場：大連教育学院(中国大連市)
 研修生：50名(3クラス)。第1回または第2回研修会の参加経験者で、各地域または各学校の日本語教育において中心的役割を果たしている小学校教師。
 講師：山田泉(法政大学教授)、池上摩希子(早稲田大学助教授)、齋藤ひろみ(東京学芸大学助教授)、鳴海佳恵(国際交流基金派遣ジュニア専門家・遼寧省基礎教育研究教師研修センター)、JICA派遣青年海外協力隊員：加藤有紀(三峡大学)、北本牧子(桂林旅遊職業中等專業学校)、小谷香織(湖北黄冈師範学院)、瀨川万有美(青海民族学院) 計8名。

2006年大連市中学校日本語教師研修会実施概要

■実施機関等

主催：大連教育学院、TJF
 助成：(財)かめのり財団
 後援：大連市教育局、遼寧省基礎教育研究教師研修センター、在瀋陽日本国総領事館在大連出張駐在官事務所、JICA中国事務所、国際交流基金北京事務所

■実施内容

期間：2006年8月20日(日)～8月24日(木) 実5日間
 会場：大連教育学院(大連市)
 研修生：30名(2クラス)。大連市の中学校日本語教師で、第2外国語(校本課程)としての日本語を担当している、もしくは2006年9月の新学期より担当する教師。
 講師：加納陸人(文教大学教授)、立花秀正(国際交流基金派遣日本語教育専門家・大連日中友好人材育成センター)、藤光由子(元国際交流基金派遣日本語教育専門家)、鳴海佳恵(国際交流基金派遣ジュニア専門家・遼寧省基礎教育研究教師研修センター)、JICA派遣青年海外協力隊員：中村直子(瀋陽市朝鮮族第一中学)、森田淳子(大連市第一中学)、山本晋也(吉林市朝鮮族中学) 計7名。特別講師：池上摩希子(早稲田大学助教授)、齋藤ひろみ(東京学芸大学助教授) 計2名。

(敬称略)



グループで設計した授業案の発表(小学校研修)。



写真素材を見ながら、活動案を考える(中学校研修)。



日本人の参加を得て、小中学校研修会の合同歓迎会がにぎやかに行われた。

■高校中国語担当教員研修プログラム

延べ約100名の高校中国語担当教員が研修に参加

2004年より5ヵ年計画で始まった、高校の中国語担当教諭と常勤講師を対象とした中国短期研修(於 吉林大学)は、今年で3回目を迎えました。一方、非常勤講師を含めより多くの教師が参加できる研修を実施しようと、昨年大阪外国語大学と国内研修を共催しましたが、今年は北九州市立大学、桜美林大学孔子学院、大阪外国語大学の各大学と共催して、北九州、東京、大阪で実施しました。4会場合わせて延べ約100名が研修に参加したことになります。中国と国内の研修の内容を連動させるべく、東京と大阪の研修には、中国国家漢語国際普及指導グループに要請して、中国短期研修を担当する吉林大学から3名の講師を派遣してもらいました。

中国研修

研修のカリキュラムは、研修対象となる日本語を母語とする高校中国語教師の要望に応え、主任講師である吉林大学の劉富華教授と協議を重ねながら作成しています。その目玉ともいえるのが、マンツーマンの発音矯正とディベートの授業です。発音矯正は、一人ひとりに課題(中国語の詩と文章)を与え、発音を直していきます。計4回行われた矯正の授業のほかに、ほとんどの人が毎日家庭教師につき、より正確な発音をめざしました。その甲斐あって、朗読発表会では、美しい中国語の響きに、講師が盛大な拍手を送りました。ディベートの授業は、中国語の表現力の向上を目的としています。賛成派と反対派それぞれのグループが、授業に向けて論点を練り上げる作業を通じて、研修生同士の相互理解が深まりました。今回は、「教育に競争原理を導入すべきか」「割り勘の是非」「順境と逆境いずれが人材を輩出するか」「年賀状は廃止すべきか」というテーマをめぐって議論を繰り広げました。研修生にとって慣れ



ないディベートを上手にまとめたのが、吉林大学の若手アシスタントと大学院生です。テレビ番組の司会者のように、見事に仕切ってくれました。

研修中、研修生は長春市第八高校の日本語授業を見学しました。「誘い」に関する表現をコミュニケーションゲーム中心に進める授業は研修生にとって大変参考になり、日本語を学ぶ高校生と話げたことも大きな収穫でした。また、中国人の家庭訪問も経験しました。

18日間の長春滞在中、週末は自由行動日にあてられましたが、自分の親の足跡をたどる小旅行をした研修生が2人いました。一人は母親が世話になった中国人を訪ねるために、黒龍江省の方正県に行きました。少ない情報を頼りに車で田舎を走りまわり、最後には捜していた人を訪ねあてることができました。もう一人は母親の生地を訪ねて瀋陽に行きました。

また、研修生の多くがハルビンに行き、731部隊記念館を訪れ、長春では偽故宮を見学しました。日中の近現代史を考えると重要な地である旧満州国の長春市で、この研修を実施することの意味をあらためて考えさせられました。

国内研修

今年は、3会場合合わせた定員が80名と拡大したため、定員を満たすか多少不安でしたが、結果的には、どの会場も定員を超える希望者がいることが分かりました。研修生も地元出身者だけでなく、それぞれ全国各地から参加がありました。東京と大阪の研修では、「高校中国語教育の目標、内容、方法」と題する授業を設け、TJFが文部科学省の委嘱を受けて進めている「高等学校における中国語と韓国朝鮮語教育の目標、内容、研究プロジェクト」(以下、「学習のめやすづくり」)の中間報告を行いました。一言でいえば、文法積み上げ式の中国語の授業ではなく、テーマごとに到達目標を設定し、それを達成するための授業づくりをすることを提案したものです。限られた時間内での報告となりましたが、研修生にはおおむね好意的に受け取ってもらえたようです。



来年度以降も、より多くの方に参加してもらえよう、研修プログラムの運営に携わっていきたくと考えています。(水口景子)

■韓国朝鮮語教育関連プログラム

韓国朝鮮語教員のための研修、今年の夏も各地で開催

TJFが関与している韓国朝鮮語教育の事業のなかで、7月と8月に実施した教員研修プログラムは次のとおりです。以下の大学講座または研修に200名近い韓国朝鮮語の現職教員や将来の講師が参加しました。

①天理大学の韓国語科教員免許取得講座[第2期]:2年間で約280時間

主催・会場: 天理大学
 期日: 2006年7月24日(月)～8月11日(金) ※2007年も開講
 受講者: 30名

②神田外語大学の韓国語特別講座[第2期]:3年間で約220時間

主催・会場: 神田外語大学、神田外語学院
 期日: 2006年7月24日(月)～29日(土)、8月21日(月)～26日(土)
 ※2007年、2008年も開講
 受講者: 23名

③第3回大学等韓国語教師研修会(京都研修):6日間、33時間

主催: 韓国国際交流財団、朝鮮語教育研究会、TJF
 会場: キャンパスプラザ京都
 期日: 2006年8月8日(火)～13日(日)
 受講者: 66名

④第3回韓国語教師研修(東京研修):5日間、30時間

主催: 駐日韓国文化院、TJF
 会場: TJF
 期日: 2006年8月14日(月)～18日(金)
 受講者: 64名

①と②は高校の韓国語教員免許を取得するための講座で、参加者の多くは韓国語以外の教科の教員免許をもっています。2年ないし3年かけて、韓国



語の教科教育法ほか所定の科目を履修することによって、韓国語の教員免許を取得することができます。③と④は現職教員の再研修を主な目的とする研修ですが、将来教えたいと考えている人も参加しました。

現在TJFが取り組んでいる「学習のめやすづくり」プロジェクト(p.14右段参照)の韓国朝鮮語部会メンバーが、京都と東京の研修会場で発表を行いました。プロジェクトは、高校の韓国朝鮮語の授業に言語コミュニケーション能力指標にもとづく明確な目標を導入しようとするものです。研修の参加者の意見や感想をプロジェクトに反映させていく予定です。(小栗章)

■国際教育活動ネットワーク/REX-NET活動協力・助成

第3回国際教育シンポジウムに助成

REX-NETは、REXプログラム^{★注}で海外に派遣された経験のある教員が中心となって3年前に設立されたNPO法人で、TJFは発足時からREX-NETの活動をサポートしています。REX-NET主催の第3回国際教育シンポジウム「グローバルな視点で今できること」が、さる6月17日(土)に大阪府立夕陽丘高校で開催され、TJFが助成しました。全国から教師や教育関係者、大阪府の中高校生を含め約100名が参加し、グローバルな視点にもとづく教育実践の報告やディスカッションを行いました(当日のプログラムは<http://rexnet.loops.jp/0606.4.1.pdf>参照)。会場の中高校生が英語を使った化学実験に参加して紙コップを飛ばしてみたり、高校生会議の取り組みについて高校生が冗談を交えながら堂々と報告するなど、REX-NETならではの発想豊かなシンポジウムでした。また、昼食にお好み焼き弁当を用意したり、会場校の音楽科の生徒が演奏を行うなど、大阪のREX-NETメンバーが中心となって地元ならではの趣向が凝らされて、参加者を楽しませていました。次回は来年6月に東京で開催される予定です。(室中直美)

★注:日本の公立学校の教員を日本語教師として海外の学校現場に派遣する「外国教育施設日本語指導教員派遣事業」。1990年より、文部科学省(開始当時は文部省)、総務省(開始当時は自治省)および地方公共団体によって実施されている。

実施事業一覧(2006年7月・8月・9月)

- 文部科学省委嘱事業「高校中国語・韓国朝鮮語の学習のめやすづくり」(～2007年3月)
- 『The Way We Are 2005 伝えたい私たちの素顔』発行(7月)
- 『国際文化フォーラム通信』第71号発行(7月)
- 『小溪』No. 29発行(7月)
- 日本語教育国際研究大会:「であい」の発表・ワークショップ実施(8月/米国ニューヨーク)
- 平成18年度高等学校中国語担当教員研修共催(8月/中国長春)
- 高等学校中国語担当教員講座共催(8月/北九州・東京・大阪)
- 第3回大学等韓国語教師研修会共催(8月/京都)
- 第3回韓国語教師研修会共催(8月/東京)
- 第3回全中国小学校日本語教師研修会共催(8月/中国大連)
- 大連市中学校日本語教師研修会共催(8月/中国大連)
- 『事業報告2005—2006』発行(8月)
- 『Annual Report 2005-2006』発行(9月)
- 『Takrabako No. 9』発行(9月)
- 『ひだまり』第28号発行(9月)

お知らせ

修学旅行セミナーを開催します

今年は一昨年の冬に続き、北京でセミナーを開催します。3泊4日の日程では、学校訪問や北京市内の見学を予定しています。詳細は小溪ホームページをご覧ください。
<http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/xiaoxi.htm>

- 主催 日本中国友好協会、TJF
- 後援 中国国家観光局(東京)
- 協力 全日空
- 日程 2006年12月26日(火)～29日(金)[成田発着、関空発着]
- 参加者 高等学校の校長、教頭、教員、生徒[成田、関空発着各40名]
- 費用 64,000円程度

高校生のフォトメッセージコンテスト作品募集中!

第10回コンテストの作品を下記の通り募集しています。たくさんのご応募をお待ちしています。詳細はコンテストホームページをご覧ください。過去の入賞作品や作品制作のヒントなどもご覧いただけます。

<http://www.tjf.or.jp/photocon/>

- 応募資格 高校生
- 応募作品 「みつめよう 伝えよう わたしたちの日常(くらし)を」をテーマに、一人の高校生を主人公にした5枚の写真と文章(400字程度)
- 賞 最優秀賞1作品、優秀賞2作品、審査員特別賞3作品、奨励賞・努力賞各10作品
- 締め切り 2007年1月10日(水)消印有効

- 審査員 田沼武能審査員長ほか3名
- 入賞発表 決定次第、応募者に通知。ホームページでも発表。

「Focus on Japan 2007」募集中!

TJFは「高校生のフォトメッセージコンテスト」が今年度で第10回目を迎えるのを記念して、海外の高校生を日本に招待し、日本の高校生と撮影・交流するプロジェクト「Focus on Japan 2007」を2007年8月に実施します。このプロジェクトでは、海外の高校生と日本の高校生と一緒に日本のある地域を訪ね、そこでであった人々を写真とエッセイで紹介する作品を共同で制作します。完成した作品はTJFのホームページや出版物を通じて世界に発信します。現在参加者を募集中です。詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/>

- 日程 2007年8月3日(金)～11日(土) 9日間
- 参加者 日本と海外の高校生各8名。
- 活動内容 16名の高校生が4名ずつ4つのチームに分かれ、宮城・東京・大阪・広島のうち1か所を訪問。地元の高校写真部の先生や生徒の案内で、人々の姿や暮らしを紹介する写真を撮影し、各チームで写真を選び、エッセイをつけて作品にしあげます。(撮影には英語・中国語・韓国語いずれかの通訳とTJFスタッフも同行します。)
- 応募方法 ホームページから応募用紙をダウンロードし、必要事項を記入して申し込んでください。
- 締め切り 2007年2月1日(木)必着
- 発表 2007年3月下旬に応募者に通知



編集後記

http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki_j.htm

PCとはよく名づけたものだなと思う。いまさら何をと言われるかもしれないが、私たちの暮らしを激変させたコンピュータはあくまでもパーソナルなものなのだ。インターネットもPCをつないだネット。国際理解も文化理解も、得てして国や地域で集団的にくって考えがちであるが、あくまでも最終的にはパーソナルなレベルで理解は深まる。文化交流も人に始まり人に終わる。交流とインターネット、どこか響きあうものを感じる。

インターネットを、相互理解をめざした交流の場に使おうとするとき、このパーソナルな部分、すなわち生身の人間の部分をどう参加する生徒たちに実感してもらうかがキーポイントとなる。自分のために書かれたメッセージ、自分のこと、自分の言いたいこと、聞きたいことを伝えるためのメッセージが基本だ。時空を超えて地球上に実在する同世代とつながっている新鮮さ、楽しさ、驚き、戸惑いを感じられるかが問われる。リアリティを実感するためには、言語表現にとどまることなく、写真、音声、動画といった各種の表現媒体を有効に使わない手はない。そしてこうした情感面への働きかけのなかで、教育的配慮がなされたコンテンツが提供されることが必要だと思う。つい参加してみたくなるコンテンツとその提供の仕方を、今回特集でとりあげたサイトは教えてくれている。

またパーソナルになればなるほど個人情報からむだだけに、安全管理上どうこれを保護するかが重要な課題だ。安全第一。これは各国の

教育関係者が口をそろえて指摘するサイトの条件である。また見えざる大人の存在、これも見落とせない条件である。教師だったり、両親だったり、サイトの水面下でネットワークが張られている。児童生徒の安全とプライバシーが確実に保護され、児童生徒も教師も保護者も安心して利用できるシステムを提供することが不可欠であり、そのために多少の面倒があっても仕方がないと誰しもが強調する。

そしてことばの問題。自動翻訳機能も優れたものになってくると経費が高い。またスタッフによる翻訳は質量ともに相当なネットワークをつくらないと長続きしない。特に多言語の立場に立っているTJFの場合、英語だけでサイトを運営するわけにはいかない。日英中韓の4言語には固執して努力をしたい。また参加者側にもことばの違いを乗り越えることにチャレンジしてほしいと思う。

サイト上での交流が深まれば、きっと本当に相手に会いにくくなる。そこでTJFでは、その思いを限られた人数でも実現させてあげるための、直接交流プログラムをオンライン・コミュニティとドッキングさせたいと考えている(p.7参照)。直接交流ならではの体験をサイトに還元してもらうためでもある。2007年春の新交流サイトのオープンに先駆けて、2007年夏の直接交流企画「Focus on Japan」の募集が始動した。Local Japan探検希望者募集である。国内からも奮ってご参加ください。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
(TJF)



国際文化フォーラム通信 72号
2006年10月発行

発行人・編集人 中野佳代子
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子
フォーマット設定 鈴木一誌
出力・印刷・製本 近代美術(株)
校閲(有) 天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1
新宿第一生命ビル26階
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215
E-mail: forum@tjf.or.jp
<http://www.tjf.or.jp/>